

## フランス知識人が見た日本の大陸・植民地政策（七）

——日本の文明化政策を讃美するエドモン・プロシユール——

ワシーリー・モロジャコフ

要旨 「フランス知識人が見た日本の大陸・植民地政策」のテーマで、これまで本誌に発表してきた論稿六編の内容は、基本的に年代を逐って書かれたものであるが、今回は例外的に時代を少し遡る。本稿では、作家・政治評論家のエドモン・プロシユール(Edmond Plauchut：一八二四～一九〇九年)の著作と活動を取り上げ、フランス知識人が日本の大陸・植民地政策に対して「親日」とも称せる傾向を持つに至った、その起源と背景を明らかにする。

このプロシユールという人物は、今では忘れ去られた存在であるが、その論集『文明の諸軍隊』(一八七六年、単行本初出)の一章として収録された論文「台湾と日本出兵」(一八七四年、雑誌初出)は、日本の台湾出兵について述べられた著作であるというばかりでなく、フランス知識人、ひいてはヨーロッパの知識人が日本の大陸・植民政策初期の歴史を「文明化」と捉えた資料としても興味深い。筆者は、フランスで近年、公刊されたプロシユールの回想録に基づいて、その生涯、活動、そして彼が抱いた東亜・中国・日本観の淵源と背景を分析して、「文明化」として捉えられた植民政策論を究明する。

キーワード：日本、フランス、台湾、出兵、文明化政策、植民地、原住民

「フランス知識人が見た日本の大陸・植民地政策」のテーマで、これまで本誌に発表してきた論稿六編の内容は、基本的に年代を逐って書かれたものであるが、今回は例外的に時代を少し遡る。本稿では、作家・政治評論家のエドモン・プロシユー (Edmond Plauchut : 一八二四～一九〇九年) の著作と活動を取り上げるが、それは、フランスの知識人が日本の大陸・植民地政策に対して「親日」とも称せる傾向を持つに至った起源と背景を明らかにする必要があるからである。

### エドモン・プロシユーとはどのような人物だったのか？

エドモン・プロシユーという人物とその著作、活動は、現在のフランスではあまりよく知られてない。例外として知られているのは、有名な小説家・社会活動家ジョルジュ・サンド (George Sand: 一八〇四～一八七六年) との交友関係である。ありていに言えば、プロシユーは「ジョルジュ・サンドの関係者の一人として」のみ思い出される存在である。ここではまずプロシユーと日本との関係を探ってみる。

プロシユーは、日本の台湾出兵（一八七四年）について、同時代において最も詳細な記録をフランス語で執筆し、その論文を、とても影響力のある雑誌『Revue des Deux Mondes』に公表した。なぜプロシユーは、台湾出兵の調査・分析を行ったのだろうか？ それを理解するためには、彼の生涯をおおよそ辿ってみる必要がある。本人の著した回想録がもっとも詳しい。晩年のプロシユーが一八九四～一九〇八年に執筆した回想録は、二〇〇九年にはじめて公刊・出版されたが、この忘れさられた作家に読者の注意を引くため、編集者・出版社は、そのタイトルを『ベリー「地方名」におけるジョルジュ・サンドの友人』とし、表紙には、本人の肖像ではなく、読者に馴染みのあるジョル

ジュ・サンドの顔を選んだ。ただ、三八四頁からなるこの刊行物のうち二八九頁はプロシユ어의回想録が占めている。<sup>(1)</sup>

エドモン・プロシユ어は、一八二四年一月七日、ブルボン王朝の皇帝ルイ一八世 (Louis XVIII : 一七五〇―一八二四年、在位一八一四―一八二四年) の時代に、オクシタニー地方にあるオート＝ガロンヌ県 (Haute-Garonne) のサン＝ゴードダンス市 (Saint-Gaudens) に生まれた。父親は海軍省に勤務していたが、将校ではなく造船用材の視察官であった。一八三八年に父親が亡くなるとエドモンは、苦しい家計のため学校を退学して、事務員として貿易会社に入社した。乏しい給料で貧しく暮らしていたこの青年は、退屈な事務より文学を好み、作家としてのキャリアに憧れていたもので、自作の詩をヴィクトル・ユーゴー (Victor Hugo : 一八〇二―一八八五年) に送った。フランスの最も有名なこの詩人が、プロシユ어의原稿を本当に読んだかどうかはわからないが、好意的な短い手紙が送られてきた。ユーゴーは、若い詩人に対していつもこのような返事を送ったといわれているが、プロシユ어はその手紙を宝物として大切に保存した。<sup>(2)</sup>

「市民皇帝」とよく称されたルイ・フィリップ一世 (Louis-Philippe I : 一七七三―一八五〇年、在位一八三〇―一八四八年) の政権下である一八四〇年代、プロシユ어は、民主主義、共和主義、社会主義の思想から強い影響を受けた。地方のジャーナリストになっていたプロシユ어は、一八四八年の革命、王政の崩壊と共和政の成立を熱心に歓迎したが、プロシユ어가初めてジョルジュ・サンド宛に手紙を書いたのはこの頃である。プロシユ어は、著名な作家・社会活動家として榮譽を手に入れていたこの文人から、国内の政治情勢とフランスにおける社会主義の将来について意見を聞いたのである。プロシユ어に同志的なものを感じたジョルジュ・サンドは、彼に関心を持つようになり、丁寧な返事を送った。その手紙は、ユーゴーの手紙と共にプロシユ어가最も大切にする宝物となった。<sup>(3)</sup>

忠実な民主主義者であったプロシユ어は、第二共和国の大統領に当選したシャルル・ルイ＝ナポレオン (のち皇帝

ナポレオン三世）(Charles-Louis Napoléon, Napoléon III : 一八〇八―一八七三年、在位一八五二―一八七〇年)を独裁者になるかも知れない人物と見て、新政権とその政策を批判し始めた。共和国制度下でも出版の自由は早々に姿を消していた。プロシューが協力していた新聞は発禁となり、無職となった二四才のプロシューは一転、海外で運試しをすることに決めた。一八五〇年一二月、その最初の航海は、カーボベルデ列島の近くで船が難破して頓挫したが、無事帰国したプロシューは、この失敗に懲りず、一八五一年に海外貿易商社に入社して、同年四月一七日、パリから出発して、新しい航海に出た。その終点はマニラ、当時スペインの植民地であったフィリピンの首都であった<sup>4)</sup>。

一等の切符を買ったプロシューは、途中で多くの場所に滞在して、現地の名所を見学した。晩年の回想録にはその旅行の記録が詳細に記されている。明らかに著者が日記に書き込んだものであった<sup>5)</sup>。同一八五一年六月二〇日、彼はマニラに到着した。

### プロシューのアジア滞在経験

プロシューは、フィリピンに約九年間滞在した。当初は会社に勤務、のち独立して商売を行い、自己資産を二七二五フラン（一八五五年）から八万三〇〇フラン（一八六〇年）の約三〇倍に増やした。フィリピン滞在中、探求心ある文人としてプロシューは、営業活動のかたわら、太平洋地方の諸民族、その生活、歴史、文化、信仰を調査・研究して、列強諸国の植民政策に精通するようになった。彼は、フランス語、英語、スペイン語が堪能だったため、現地の貴重な情報を収集することができ、また人脈の構築にも成功したらしい。フィリピンでの経験は、本稿のテーマとは関係ないが、植民政策通としてのプロシューという人物の形成に決定的な影響を及ぼした、と結論できる。その能

力、知識と人脈は、帰国以降もプロシユの主な知的資産になった。

あの時代と世代を代表するヨーロッパ人であったプロシユ人は、すべての民族が平等であるとは、考えていなかった。彼は、「人類文明」は西洋また欧州文明のみと確信していたので、「野蛮人」と呼ばれていたアジア・アフリカ・オセアニア原住民を「キリスト教・白人」が「文明化」する権利または使命を持っている、と真面目に考えていた。今では考えられないことであるが、当時はそれが一般的であった。それを前提にしないと、プロシユの日本観、中国観、台湾観を理解することはできない。

フィリピン滞在九年の後、プロシユ人は、一八六〇年七月二日マニラを出発して、香港と上海を経由して横浜に到着した。フランス人として彼は、とくにイギリス人に好意的ではなかったが、その植民政策の成果については高く評価した。最も酷い批判を浴びたのは中国人である。プロシユ人は、彼が受けた印象に従って、中国人を、無知で不活発、そして打算的で冷酷であり、完全な無信仰者の民族だと見なした。彼は自身商売人であったが、中国人家族の「娘の商売」の話を憤慨して語っている。

一方、プロシユの目に映った日本は、中国と完全なコントラストであった。プロシユ人は、国際貿易港として開港された横浜の人々を「〔日本〕帝国の最も正直ではない人たち」と評しはしたが、「中国人と比較すれば日本人は圧倒的な優越性を持つ」とも宣言した。「一方〔日本人〕は言葉の深い意味で『アーチスト』であるが、他方〔中国人〕は自分自身を身売りする商人根性を持つ。一方〔日本人〕は鉄道と電信を開通させ、自分で武器を生産して、陸海軍将校には我ら〔欧州〕の制服を着せるが、他方〔中国人〕は、進歩また新習慣、新発明を恐れながら、我ら〔欧州〕の悪習に染まって、イギリスから武器を買う」などと彼は述べた。勿論、プロシユが来日した一八六〇年に日本はまだ鉄道と電信は存在しなかったが、彼は正しくその傾向を見通した、と思われる。このフランス人はまた日本人

の美的感覚を特に強調した。<sup>(8)</sup>

プロシユの幕末日本の印象・感想は、「一瞥」に過ぎなかったが、強烈であった。彼が抱くに至った日本観と中国観にはその印象の影響が明らかに見られる。感情的にプロシユは「親日」、そして「反中」になったと言える。

一八六〇年九月一二日プロシユは帰国してル・アーヴルに戻った。その後の約半世紀、彼がフランスを離れたのはエジプト旅行だけで、アジアを訪れることはなかった。しかし、アジア・アフリカ事情の観察は、その後の著作活動における主要テーマとなったのである。

### 国際政治・植民政策評論家プロシユとその著作

ジョルジュ・サンドとの初対面（一八六一年三月一九日）後、プロシユは直ぐにこの小説家とその長男モリス・サンド（Maurice Sand：一八二二～一八八九年）の友人になった。その交遊は彼の最も大切な思い出になった。

フランスでの商売・営業活動に失敗したプロシユは、作家としてのキャリアに復帰した。彼は一八六五年から、自分の旅行体験をもとに、カーボベルデ列島の難船等の冒険をテーマとした物語の執筆を始め、のち国際政治の問題、特に植民政策の調査・研究・分析に従事した。ジョルジュ・サンドは、彼の原稿を自分の手で書き直して、友人として彼を影響力の高い雑誌『Revue des Deux Mondes』の編集者に紹介した。一八六九年からプロシユは、この雑誌の協力者になって、自分の経験及び知識と能力に基づいて、詳しく読みやすい海外事情関係論文を書き始めた。その活動が彼の本業になったのである。

総合雑誌『Revue des Deux Mondes』の知識人読者は、海外情報とその分析とともに面白い「ストーリー」を読み

たがった。そこで、プロシユールが選んだテーマと問題には、フランスで話題になったエキゾチックな地域での事件、出兵、探検等に関するものが多く、彼は、その地理的、歴史的背景を詳しく説明した。<sup>(9)</sup>

一八六九年以降、プロシユールは、自分が熟知しているフィリピン列島をめぐる海賊行為についても記述している。一八七三年、前年に国際問題になった「マリア・ルス」号事件はそのテーマの一つであった。横浜港に到着したベルー船籍「マリア・ルス」号には中国人(清国人)苦力(欧米で「coolies」として知られている)二百三十数名(プロシユールの情報では二三八名)が乗船していたが、その中の数人が過酷な待遇から逃れるために監視の目をかいくぐって海中へ逃亡し、イギリス軍艦に救助を求めた。イギリス公使は「マリア・ルス」号を「奴隷運搬船」と判断し、日本政府に対し中国人救助を要請した。国際的批判の波及び交渉と裁判により、中国人は解放されて帰国したので、清国政府は日本の友情的行動への謝意を表明した。「マリア・ルス」号事件の解決は、国際政治の舞台における明治日本の外交的な勝利と評価された。プロシユールは、その事件を記録して、自分も知っているマカオ港を中心とした中国人苦力と奴隷販売に近いその移民・輸送の状態を詳しく説明して、南米諸国の対応や清国の現地行政官僚の行動を厳しく非難した。<sup>(10)</sup>しかし、プロシユール自身が一八六〇年以降現地にいなかったことは言及しなかった。

同じく一八七三年、プロシユールは、西アフリカにおけるアシャンティ王国原住民の対イギリス戦争の歴史(一八〇五年から)と現状を記述・分析した。著者は、度々生贄を捧げる儀式と拷問を行い、敵又は外国人に容赦のない原住民を「野蛮人」(les sauvages)と呼んで、「その外交(diplomatic)は特に巧妙で、規則も宗教もないので最も危険だ」と述べた。欧州人が植民地拡大のために戦っている原住民との闘争は、経済的に高価であり、死傷者も多かった。そしてプロシユールは、イギリスで討論されている問題「アフリカ植民地は、その保持のために定期的に必要な財政と人命の損失に値するかどうか?」と述べた。勿論、その問題はイギリスの問題だけでなく、列強諸国全般の植民地

大政策の基本的論点であった。プロシユの答えははっきりしている。「我ら〔フランス人〕は、野蛮行為より文明の大勝利をはっきり望んでいるが、力強い隣人〔イギリス人〕は、黒人に対して……きわめて過酷な措置を使用しすぎないことも望む<sup>①</sup>」。オランダ人がスマトラ島で行った原住民アチェ王国に対する戦争も、基本的に同じように評価された<sup>②</sup>。原住民の「野蛮行為」を非難してもフランス文人は徹底的に「ヒューマニスト」の顔をしたのである。以上のべたところは、プロシユの日本の台湾出兵観とその判断・評価の歴史的、政治的背景である。

### プロシユの台湾出兵観と日本の政策に対する判断・評価

当時の国際政治、特に欧州列強の植民地政策の立場から見れば、一八七四年に行われた日本の台湾出兵には世界的な意味と意義があった。そしてプロシユは、その関連情報を綿密に収集して、いち早く「台湾と日本出兵」を執筆して、論文を『Revue des Deux Mondes』（一八七四年一月一日号）に発表した<sup>③</sup>。プロシユは「台湾」の呼称を「フォルモサ」(Formose)としているが、本稿で翻訳した引用には「台湾」とした。

プロシユ著『台湾と日本出兵』は、日本の台湾出兵の過程、その歴史的、外交的、民族的背景についてフランス語で発表された最も詳しい記述及び分析であった。当時フランス語はまだ世界的に読める言語であったので、プロシユの論文はフランス国内以外にも広く読まれた。帝政ロシアのサンクト・ペテルブルグで出版された一般読者向け雑誌『Zhivopisnoe obozrenie』は、一八七五年にその全訳を公刊した<sup>④</sup>。

ただ、その翻訳は『Zhivopisnoe obozrenie』が公刊した台湾出兵の最初の記述ではなかった。プロシユ著作が公刊される一ヵ月前、同誌は、日本・台湾滞在中のロシア海軍将校パーヴェル・イビス (Pavel Ibis: 一八五二〜一

八七七年）の著『中国と日本の間の台湾問題——長崎から「Zhivopisnoe obozrenie」編集部宛書簡』を公刊していた<sup>15</sup>。イビスの論文も詳しいが、その論調は、日本の政策、行動と宣言に対して批判的、また風刺的であった。

プロシユの著作は、日本政府及び陸海軍の行動に対する「讚美歌」であった。「教育が悪く、給料が低く、軍事的光栄の感じがほとんどない中国（清国）軍と全く違って、日本軍は、武器が最高で、勇気も素晴らしい<sup>16</sup>」のような評言はその文書で一般的である。現在から見れば、この論文に目新しい情報は何もないが、その論調と歴史的背景は興味深い、と筆者は考える。

それではプロシユは、「日本の宣伝者（プロパガンディスト）」であったのだろうか？ それを判断する証拠はないが、彼は本心からそう考えていた。論文において日本を讚美し、中国（清国）を批判し、台湾原住民を「野蛮人」として描き出した理由は、はっきりしている。

第一に、プロシユには台湾に対する自身の経験が全くなく、資料はほとんど日本側発の情報に限られていたこと。現地（台湾及び日本）の欧米人からの報告も、その論調は比較的に中国側より日本側に好意的であった。中国側は、プロシユが利用できるフランス語、英語、スペイン語の情報を提供したり、宣伝したりしていただろうか？ 原住民に対して同情がなかったのは確かである。

第二に、プロシユは、日本の台湾出兵を「文明対野蛮」、「文明化対野蛮行為」の戦いと見なした。ヒューマニストであったとしてもフランス人には、原住民及び中国人の行為に対する好感や同情は全くなかった。プロシユの世界観に従えば、日本は台湾で文明のために戦い、現地の事態によって残酷な措置を講ずる必要があった。プロシユは、台湾における日本軍の行動を讚美するばかりでなく、論文の末尾にこう述べている。「台湾での素晴らしい仕事の後、おそらく「近い」将来、「日本は」朝鮮で自分の武力を試すことになるだろう。……朝鮮人は、今や永遠に

抑圧されているブタン人〔台湾原住民のブタン族〕と同じように野蛮人であり、外国人に敵対している。もし日本人が、ブタン人と同じように朝鮮人を打ち負かすとしたら、彼らは進歩と自由のために戦う唯一のアジア民族になる<sup>(17)</sup>。この記述は、当時の思考とメンタリティをよく表わしている。

第三に、明治維新以降、日本の近代化は西洋化（westernization）として行われていた。西洋（欧州）文明以外に「文明」は存在しないと信じていたプロシューは、日本の「文明化」を讚美した。幕末日本を自分の目で見た時、彼が何を考えたのかは明確でないが、回想録には「非文明的」な日本人のイメージは残っていないなかった。個人的な好ましい印象と西洋化という「文明化」への高い評価が彼の中で一つになっていたと思われる。逆に、プロシューが見た中国人の個人的に消極的なイメージと「文明化」しない（「文明化」したくない？「文明化」できない？）清国の評価も一体になったものと推論できる。結論として言えば、プロシュー個人の二八六〇年から持ち続けた印象と、好き・嫌い、その一八七四年の政治・文明評論家としての意見に明らかに影響を及ぼした。

四つ目の理由は筆者の推論であるが、プロシューが作った日本の明るいイメージには「ジャポニズム」（日本趣味）のファクターが大きく与かったと思われる。当時のヨーロッパにおける日本のイメージは、明治維新後、バリ万博（一八六七〜一八六八年）での日本の伝統的文化・美術との出会いの影響が強かった。フランス文化における最初の「ジャポニズムの世代」は、ちょうど印象派の画家エドゥアル・マネ（Edouard Manet：一八三二〜一八八三年）、エドガー・ドガ（Edgar Degas：一八三四〜一九一七年）、クロード・モネ（Claude Monet：一八四〇〜一九二六年）などと、彼らに近かった文人である。プロシューが印象派の画家と親しかったかどうかはつきりしないが、歌麿と北斎の伝記・美術評論を執筆したエドモン・ド・ゴンクール（Edmond de Goncourt：一八二二〜一八九六年）は知り合いであった。プロシューのこの美しい日本のイメージは時代の雰囲気であったと言える。

フランス知識人の読者に日本とその台湾出兵を論じて紹介するに当たって、プロシューは、新しい日本の文明化政策とその能力を強調したが、その考え方は、当時のヨーロッパではまだ珍しかった。欧州の評論家は、西洋化として国の近代化を進めていた日本の努力を高く評価はしても、日本が海外で「強盗・野蛮行為と戦って」、「文明化」できるとは、ほとんど論じていなかった。あの時代の思考とメンタリテイでは、「文明化」政策を行えるのは白人キリスト教の国家・民族に限られていた。プロシューは、明治日本とその陸海軍を「文明の軍隊」（「文明化の軍隊」である可能性もある）と呼んで、台湾出兵の概説を論集『文明の諸軍隊』（Les armées de la civilisation : ceci de 複数にして）と云うところが大事な点である）の第一章に掲げた。フランス、イギリス、オランダより日本の文明化政策を高く評価したプロシューは、明らかに意味深長な宣言をしたことになる。

「日本の改革とその国内闘争（明治維新前後の出来事の意味）」を注意深く観察する人物（西洋人）は、ミカド（天皇陛下の意味）の台湾出兵命令をよく知っている。『親日』と見られる極東の外国（語）新聞は、江戸（ママ、東京の意味）の政権が中程度の意見を聞いてその冒険（台湾出兵）の提案を拒否する、と考えた。しかし、その勇気ある民族（日本人）の政治的知性と好戦的精神は、節度を求める小市民的な意見を克服した。……野蛮行為に打ち勝った文明の成功を、我ら（西洋人）は、勿論心から認めなければならない<sup>(19)</sup>、とプロシューは発言した。

### プロシューの文明化政策論とフランス植民政策関係の議論

プロシューは、他国の文明化政策を論じつつ、いつもフランスの政策を考えた。同論集の第二章「トンキン」は著作の中心であった。その主要なテーマは、一八七三年のトンキンにおけるフランス海軍将校フランシス・ガルニエ（欧

米の「Francis Garnier」と呼ばれた François Garnier（一八三九～一八七三年）が率いる部隊の出兵であった。<sup>20</sup> フランス知識人読者は、エキゾチックな地方の読書を好んだが、自国の政策に最も関心があった。植民政策、その可能性と将来は、当時のフランス政界における一つの重要な話題であった。

一八七〇～一八七一年の普仏戦争に負けたフランスの政治エリートは、本来の地政学的活路を探していたが、一方、戦争の結果として統一されたドイツ帝国に対する復讐を国策の中心、又は戦略的な目的として見られる勢力の影響が強かった。その立場から見れば、東亜を含めて本土から遠く離れた地方における植民拡大政策は、ありえない財力と労力の分散であった。

他方、海外拡大政策をフランスのもっとも望ましい方針と見なした勢力は政界に強かった。財界も、貿易発展及び資源開発を考え、復讐より植民拡大を国策の中心として宣伝した。ことにフランス第三共和国の政治エリートの影響は日増しに強くなっていった。それと共にドイツ帝国政府とビスマルク（Otto von Bismarck：一八一五～一八九八年）首相自身もその政策を支持した。政治的レトリックとして、「利益」より「文明化」の言葉がフランスの「ミッシヨン」（使命）の表明として利用されていた。<sup>21</sup> その方針を宣伝・実現する最も有力な政治家として有名になったジュール・フェリー（Jules Ferry：一八三二～一八九三年）は、一八八〇年九月～一八八一年一月、さらに一八八三年二月～一八八五年三月、首相（一八八三年一月から兼務外相）を務めた。フランス政界でフェリーのニックネームは「トンキンの人」（Le Tonkinois）であった。<sup>22</sup>

一八七六年以降、プロシユは、日本とその政策を中心に論文を執筆することはなく、植民地政策諸問題についても、中国関係がその分析・研究の主要な課題であった。その視野も広がった。『Revue des Deux Mondes』に公刊された論文は、「カナツクの反乱」（一八七八年、ニューカレドニアのメラネシア系先住民族の反フランス闘争について）、

「清国における新しい開港場」（一八七八年、北海市と芝罘条約について）、「中央アメリカの海洋横断運河——パナマ運河」（一八七九年、フランス内政の「パナマ運河疑獄」⇨パナマ事件の原因になったパナマ運河株式会社の設立とその運河建設提案について）、「トシキンの併合」（一八八〇年、その由来と遠望について）、「クルジャ（地方）における中国人とロシア人」（一八八一年、清国とロシアの政治・経済的競争について）、「フランスとマダガスカル」（一八八四年、マダガスカルで一八八二年に施行されたフランス保護統治について）、「エジプトとイギリスの支配」（一八八八年、エジプト・イギリス関係とマフディー戦争について）、「チュニジアにおけるフランス」（一八九〇年、チュニジアにおけるフランス保護統治について）等多数であった。プロシユは単行本で『エジプトとイギリスの占領』（一八八九年）と『皮膚の黄色い人類——中国人』（一八九八年、英文翻訳一八九九年）を出版している。

本稿ではこれら著作の内容には立ち入らないが、以下のような結論を導くことができる。第一に、プロシユはフランスで植民地政策の専門家と中国関係の事情通と見られていたこと。第二に、プロシユは「文明化」政策を徹底的に支持していたこと。しかし、フランス政界におけるその影響力を具体的に判断するのは難しいと思われる。

エドモン・プロシユは、第三共和国設立後四八年を経た一九〇九年一月三〇日に、ヌーヴェル・アカテーヌ地方のピレネー・アトランティック県 (Pyrénées-Atlantiques) のビアリッツ市 (Biarritz) で死亡した。享年八五。ジョルジュ・サンド関係の回想録以外には、その著作はほとんど忘れられている。しかし、論集『文明の諸軍隊』の一章になった「台湾と日本出兵」は、日本の台湾出兵の歴史ばかりでなく、フランス知識人、また欧州知識人が「文明化」として見た日本の大陸・植民地政策初期の歴史に対する資料として、また論拠として興味深い書籍である。

註

本稿の引用は全て筆者が外国語から翻訳したものである。

- (1) Michelle Tricot, Christiane Sand, *L'ami de Georges Sand à Berry: Edmond Plauchut, le tartarin de Nohant* (La Crèche: Gesté éditions, 2009)。クリスティアン・サンド女史は、ショルミュ・サンドの曾孫と結婚して、数十年間、サンド家の屋敷、博物館、文書を管理するともに、その研究・啓蒙活動を行った。歴史・文学者シセル・トリコー女史は、クリスティアン・サンドの指導のもとサンド家の文書を研究して、共著数冊を執筆した。
- (2) 同上、pp. 21-22。
- (3) 同上、pp. 18-21, 28-33, 54-60。
- (4) 同上、pp. 66-135。
- (5) 同上、pp. 136-200。
- (6) 同上、pp. 200-226。
- (7) 同上、pp. 227-257。
- (8) 同上、pp. 259-264。
- (9) フロシユエの主要な論文一覧は、同上、pp. 380-381。
- (10) 『Revue des Deux Mondes』初出の論文はフロシユエ著論集『文明の諸軍隊』(一八七六)の第五章になった。Edmond Plauchut, *Les années de la civilisation. Les Japonais à Formose. Les Français au Tonkin. Les Anglais à la Côte d'Or. Les Hollandais à Sumatra. La traite des Coolies à Macao*. Paris: Calman Lévy, 1876, pp. 311-348, ほか。一〇一九年にフランス国立図書館(BnF)のHachette livre 出版社はその書籍を影印本として再出版した。
- (11) 上の論文の『Revue des Deux Mondes』初出の論集『文明の諸軍隊』の第三章になった。Plauchut E., *Les années de la civilisation*, pp. 175-268 (引用は pp. 203, 214, 267-268) ほか。
- (12) Plauchut E., *Les années de la civilisation*, pp. 269-310。
- (13) Edmond Plauchut, *Formose et l'expédition japonaise // Revue des Deux Mondes*, T. 6 (15 Novembre 1874), pp. 447-466。

- (14) Ed. Plauchut. Esche o Formoze i yaponskoi ekspeditsii [台湾と日本の出兵について] // *Zhivopisnoe obozrenie*. 1875. No. 13. pp. 200-205; No. 14. pp. 218-221.
- (15) P. Ibis. Formozskiy vopros mezhdu Kitaem i Yaponiey. (Pis'mo v redaktsiyu «Zhivopisnogo obozreniya» iz Nagasaki) // *Zhivopisnoe obozrenie*. 1875. No. 8. Pp. 120-124. その論文の再公開と歴史的解説は、V. Ts. Golovachev, «Ekskursiya na Formozu». *Etnograficheskoye puteshestvie P.I. Ibisu*. Moskva [Moscow]: Institut vostokovedeniya RAN: Ves mir. 2019. pp. 124-132 (本文). 69-72 (解説)。イビスの評伝・著作集・資料集がある単行本とその著者ワレンティン・コロワチョーフ(歴史学博士、現職ロシア科学アカデミー東洋学研究所副所長)の著作・研究活動の紹介は、ワシリー・モロシヤコフ著「ロシア人学者が検討した世界史学の中での台湾民族政治史」(『拓殖大学 台湾研究』第四号(二〇二〇年三月)一四一〜一五三頁)・同著「欧州から見た台湾原住民 一八七〇〜一八八〇年代及び一九二〇初代——新しい研究と資料」(『拓殖大学 台湾研究』第五号(二〇二一年三月)七八〜八一頁)。
- (16) Plauchut E. *Les armées de la civilisation*, p. 53.
- (17) 『Revue des Deux Mondes』初出の論文をプロシユ著論集『文明の諸軍隊』(一八七六)の第一章になった。Plauchut E. *Les armées de la civilisation*, pp. 1-54 (引用は、pp. 53-54) である。
- (18) Plauchut E. *Les armées de la civilisation*, p. viii.
- (19) 同上、pp. 1-2, 267.
- (20) 詳細は、Edouard Petit, *Françis Garnier. Sa vie, ses voyages, ses œuvres d'après une correspondance inédite*. Paris: Maurice Dreyfus, 1897; Roger Vercel, *Françis Garnier. À l'assaut des fleurs*. Paris: Albin Michel, 1952等。
- (21) 当時の代表的な発言は、J.-L. de Lanessan, *L'expansion coloniale de la France. Etude économique, politique et géographique sur les établissements Français d'Outre-mer*. Paris: Felix Alcan, 1886.
- (22) フェリーの東亜植民政策とその結果の分析は、G. Manceron, 1885: *le tournant colonial de la République*. Paris, La Découverte, 2007.

(原稿受付 二〇二三年九月二一日)